

資料渉猟余話

その115

『夕樺』の表紙の絵ははじめ太田南海、そのあと伊藤真之介、須山計一が引き継いでいる。創刊号を描いた太田南海は松本中町生まれの彫刻家であり、はじめは彫刻を依頼したが、当時太田は中央美術協会彫刻部幹事の職にあり忙しかったので、彫刻のかわりに絵をかいてくれた。絵は天竜峡の傍らに白樺の大木を配したものである(写真3)。

『夕樺』は月一回の短歌会を開き、その図柄が替わり白樺の木の下に裸体の女性が生首を垂れて座っている(写真4)。翌大正十一年一月第二巻第一号から伊藤真之助が描いている(写真5)。伊藤は飯田市伊賀良出身の洋画家、小学校教員と

生主義に對抗、蕉風写生を主張した。歌の俳諧の精神を歌の基本とし、象徴主義を唱えた。下伊那短歌の隆盛には太田水穂の功績は大きい。青山樺三郎は南箕輪村出身、前記『山河』を主宰する。宮崎茂は下高井郡穂波村(現山ノ内町)生まれ、長野師範卒業後、阿島、下久堅、飯田の小学校に勤務し、のち『潮音』の同人となる。窪田空穂は東筑摩郡和田村(現松本市)生まれ、国文学者、早大教授。島木赤彦は上諏訪村生まれ、アララギ派の代表的歌人であり、伊藤左千夫に師事し歌誌『アララギ』を編集、図画教育の

歌誌『夕樺』とその周辺 2

清水 迪 夫

しかし、『夕樺』の同人には青年運動のメンバーが多く、青年たちの活動の中心がそちらに移り始め、羽生三七は早くもその年五月に回覧

のことも時折きく、ちよっとおかぶれをこらえて主張するのをきくと、いやみで耐えられない。芸術表現に善悪貴賤などのごとを論ずるだけ愚だ、ほんとうのものほどごまで行っても、ほんとうのものなんだ。真にアーチストたらんとする人とともに自由と真剣との力に満ち充ちて進みたい」と、『夕樺』の芸術は芸術のためにのみあるとす

る芸術至上主義を強く主張している。全盛期は三百名を越した同人も減少していき大正十二年に廃刊となった。最終号の「終刊の辞」は次のように書かれている。



(写真3)『夕樺』創刊号(表紙)



(写真4)『夕樺』第一巻十月号(表紙)



(写真5)『夕樺』第二巻一号(表紙)

『夕樺』の継続に尽力したが、大正十二年三月第三巻二号をもって廃刊となった。最終号の「終刊の辞」は次のように書かれている。

最後に創刊当時の同人(吉川秀穂は入院中)の歌を創刊号の中から挙げておこう。(以下略)

夕日赤く野の面に映えて霜萎えの桑の葉
山に見入る朝かも
芒藪(ぼうさく)乏しきあたり
あらはれて波がしら白く光る河なり

岡本笛人

夜更かしの幾日つづきぬ身のつかれこの頃朝寝の多くなり降りやまぬ雪にふるえて今頃はは坂あり友は来るらん

今村邦夫

(完)